

発達支援研究所ホームページ <https://smart-kids.co.jp/lab/>



スマートキッズプラス 三郷第二

ボクシング、おもちゃ、ゲーム、仲良しなどをテーマに、ひとりひとりの「楽しい!」「嬉しい!」がちりばめられた教室が完成しました。

格差を埋める:よりインクルーシブで公平な世界を目指して

スウェーデン・ボロース大学 PhD ナスリーン・オルソン

私たちが生きる世界は、多様な身体、心、経験、生き方によって形づくられています。人は、それぞれ異なる方法で動き、コミュニケーションをとり、学び、世界を感じ取っています。この多様性は克服すべき課題ではなく、むしろ受け入れ、称賛すべき力強さです。インクルーシブな社会は、すべての人にとっての公平さと参加が、社会的・文化的・経済的な生活を豊かにすることを理解しています。

国際的な枠組みとして、国連の「世界人権宣言」や「障害者の権利に関する条約(CRPD)」、そして「欧州アクセシビリティ法」などは、障害のある人々が教育、労働、文化的生活、医療、情報など、あらゆる分野において完全に参加する権利を持つことを明記しています。また、国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」も、誰一人取り残されない、公正で包摂的な世界のビジョンを共有しています。

しかし現実には、こうした枠組みが掲げる約束は、いまだ完全には実現されていません。多くの人々が、日常生活の中でアクセスや情報、参加の面で障壁に直面しています。テクノロジー、制度、環境の多くは、人間の経験の多様性を前提に設計されていないのです。世界保健機関(WHO)によると、世界では推定13億人(世界人口の6人に1人)が何らかの重大な障害を抱えて生活しています。ヨーロッパだけでも約1億3500万人にのぼり、高齢化や慢性疾患の増加に伴い、その数は今後さらに増える見込まれています。

こうした背景のもと、私たちはこの約10年間、テクノロジー、デザイン、そして共創の力を活用しながら、よりインクルーシブな社会の実現に向けて研究と実践を続けてきました。

たとえば、私たちが以前に取り組んだEUのH2020プロジェクト「SUITCEYES」では、視覚と聴覚の両方に障害のある人々の生活に焦点を当てました。スマートテキスタイル(編集注※繊維にセンサー等を組み込んだ新しい素材)、人工知能、触覚フィードバックを活用し、触覚によるコミュニケーションや空間認識を支援するインタラクティブなプロトタイプを開発しました。私たちの目標は、単なる補助ツールを作ることではなく、つながり、学び、創造的な表現の新しい可能性を開くことでした。

この土台の上に、私は現在「MuseIT」プロジェクトを主導しています。これはEUの支援を受けた国際的な取り組みで、文化への参加をよりアクセスしやすく、包括的にすることを目的としています。視覚や聴覚に限らず、触覚、振動、感情の共鳴を通じて、人々が芸術や文化遺産にアクセスできるプラットフォームの開発を進めています。

たとえば、あるプロトタイプでは、絵画をただ「見る」のではなく、色の音声説明を聞いたり、波や風を模した振動を感じたり、その絵の感情的なトーンから着想を得た音楽を聴いたりすることで、絵画を体感的に「感じる」ことができます。このように、文化は視覚や聴覚に限定されない、多感覚的な体験として再構築され、多様な方法でアクセス・解釈できるものとなります。

また、遠隔地にいる人同士が音楽や芸術作品を共同で創作できるツールの開発にも取り組んでいます。中には、感情の状態を感知し、触覚フィードバックを通じて伝える技術もあり、音だけでなく「感じること」によっても、創作の中でつながることが可能になります。



このプロジェクトの中心には、「インクルーシブなデジタルアーカイブ」の構築があります。さまざまな背景を持つ人々による文化的な貢献が、複数の形式で保存・体験される場です。視覚的または言語的でない表現——たとえば触覚パターンや感情的印象、伝統的でない芸術表現——を記録し、共有する新たな方法を探求しています。

これらすべての取り組みは、スウェーデンのボロース大学にある「Include – インクルーシブ・スタディーズ研究センター」でのより広範な活動とつながっています。このセンターには、環境、制度、テクノロジーを排除のない形で再設計することに情熱を注ぐ、さまざまな分野の研究者が集まっています。私たちは「ユニバーサルデザイン」や「共創」の原則に基づき、障害当事者が研究の対象となるだけでなく、解決策を共に創り出す「共著者」として関わることを重視しています。

この活動は国際的かつ協働的なものであり、私はスウェーデンという社会的背景の中でこの仕事を行っています。スウェーデンは、進歩的な社会政策と強固な福祉制度で知られています。ここでは、「社会が個人に適応すべきである」という価値観が公共制度に根付いており、インクルージョン(包摂)は社会全体の責任とされています。しかし、こうした制度があっても、すべてが自動的にうまく機能するわけではありません。アクセシビリティや参加は常に見直しと改善が必要であり、インクルージョンの実現には継続的な努力、創意工夫、そして意志が求められます。

私たちの仕事は、こうした継続的なニーズに応えるものであり、「インクルーシブな発想」と「共創」が、どのような社会においても不可欠であることを示しています。

インクルージョンとは、単なる技術的な目標や政策の要件ではなく、「人間の尊厳」に関わることです。すべての人が社会に参加し、自分自身の言葉や方法で表現し、世界を形づくる当事者となる——その権利があると認識することです。真のインクルーシブな社会は、あらゆる人の知識、視点、創造性を大切にし、多様な在り方や表現、関わり方のための余白をつくります。

スウェーデンと日本はともに、高齢化やテクノロジーの進化、社会の変化という課題に直面しています。だからこそ、私たちは互いから学ぶことがたくさんあると信じています。努力や問い、夢を共有することで、私たちは人間の多様性を尊重し、誰もが居場所を見出せる世界に、少しずつ近づいていけるのではないのでしょうか。



プロフィール Self-introduction

ナスリーン・オルソン スウェーデン・ボロース大学 PhD

こんにちは。私はナスリーン・オルソンと申します。スウェーデンのボロース大学で准教授をしています。研究の関心は、人々の毎日の生活の中にある「権力」や「実践」、そしてそれらが社会の仕組みとどう関わっているのか、という点にあります。

最近特に、情報通信技術(ICT)が社会にどんな影響を与えるのか、また、情報の扱い方が人々の機会を広げたり、逆に制限したりすることに注目しています。こうした課題に取り組むために、私は参加型の研究スタイルを大切にしており、触覚を使ったコミュニケーションの方法や新しい技術の開発にも挑戦してきました。

また、「みんなにとってやさしい技術や空間」をどうつくれるかを考えながら、研究環境の発展にも力を入れています。現在は「INCLUDE – インクルーシブ・スタディーズ研究センター」のディレクターとして活動し、社会の中で「ノーマル」とされる考え方や、構造的な不平等を問い直す研究を進めています。

これまで、EUのプロジェクト「SUITCEYES」ではコーディネーターを務め、今は「MuseIT」というプロジェクトで同じ役割を担っています。研究を通して、少しでも社会をよりインクルーシブにしていくことを目指しています。

関連リンク

- 国連:世界人権宣言
<https://www.un.org/en/about-us/universal-declaration-of-human-rights>
(最終アクセス日:2023年6月12日)
- 障害者の権利に関する国連条約(CRPD)
https://commission.europa.eu/strategy-and-policy/policies/justice-and-fundamental-rights/disability/united-nations-convention-on-rights-persons-disabilities_en
- 持続可能な開発目標(SDGs)
<https://sdgs.un.org/goals>
- 欧州アクセシビリティ法
https://commission.europa.eu/strategy-and-policy/policies/justice-and-fundamental-rights/disability/union-equality-strategy-rights-persons-disabilities-2021-2030/european-accessibility-act_en
- MuseIT プロジェクト
<https://www.muse-it.eu/>
- SUITCEYES プロジェクト
<https://suitceyes.eu>